韓国の土器窯集成（1）

－京畿道・忠清道編－

植　野　浩　三

はじめに

韓国の原三国時代以降の窯跡資料は、近年急激に増加しており、ほぼ全国的に確認することが出来る。韓国の窯跡調査の動向は、かつて筆者が整理したように（植野2003）、1970年代の比較的単発的な調査段階を経て、1980年代には大規模開発に伴って広範囲の発掘調査が実施されるに至った。そして、1990年代から現在にかけてもその傾向は継続しており、膨大な発掘資料が蓄積されている。こうした資料の増加にともない、多方面にわたる多くの論考も提出されるようになり（崔秉鉉1990、李相俊1997、朴秀鉉2001、柳基正2002、權五榮2005、他）、窯業生産研究もしだいに発展してきている。

小稿はこうした資料の急増期にあって、窯跡の基本資料の収集・集成を行い、分布や時期、構造等の全体的な把握を行うものである。今回は、京畿道・忠清道地域の原三国時代から三国時代の窯跡を中心に取り扱う。次回には、他地域の資料を集成し、将来的には百済・馬韓・伽耶・新羅の各地域の特色や時代的な傾向について整理したい。また、日本列島との比較を行いつつ、日韓窯業生産の関連性についても検討を行う予定である。

韓国では、軟質土器や陶質土器あるいはその中間的な瓦質的な土器を同一窯で焼成する場合もあり、窯の全てが陶質土器専用とは限らない。従って、陶質土器の窯であっても一般的に土器窯と称する場合が多い。小稿ではこうした名称について特に拘るつもりないが、土器窯あるいは窯跡とは、所謂、新石器時代以降、各地で確認されている露天窯的なものではなく（배성칙2007）、密封が可能であり、還元焔焼成も可能な室窯構造をもつ施設であると認識しており、小稿ではこの定義に従いたい。

１．近年の窯跡調査と研究

韓国では京畿道・忠清道に限らず、各地で窯跡調査が増加している。近年では、光州・杏岩洞遺跡において20基近い窯跡が調査され（鄭一2008）、５世紀以降の長期間にわたる生産の実態が明らかになりつつある。また、羅州・五良洞遺跡においても19基の窯跡が確認され、その一部が発掘調査されている。同窯跡群の製品は、周辺の古墳群へ供給したことが明らかで、古墳群造営と密接に関連があることが指摘されている。一方、原三国時代を中心とする集落遺跡に隣接して存在する土器窯の調査についても近年調査例が増加しており（表１）、供給圏に関する積極的な研究も展開しつつある（權五榮2005）。

光州・杏岩洞遺跡を調査した鄭一は、同窯跡群の整理・分析を行い、あわせて京畿道～全羅道にかけての窯跡を集成して、全体的な傾向について整理した。それによれば、原三国時代や４世紀以前の窯は、鎮川・三龍里、山水里窯跡群を除外すると、ほとんどが集落内に存在し、３基未満のものが多い。このような窯は、自給自足的な小規模な生産であった可能性があるとした。この時期の窯は、半地下式と地下式があり、平面形は長楕円形と細長形があり、床面傾斜も20度以内のものが多いとした。そして、燃焼部と焼成部の境に段差をもつ「垂直型燃焼室」が大

部分であると指摘した。

そして湖南地方では、５世紀以後に初めて専門化、分業化した窯業集団が成立し、大単位、大量の生産が行われるとし、前段階とは大きく様相が異なる点を指摘した。特に栄山江流域ではこのような窯跡群が数ヶ所存在し、百済の地方制度編成下に属しながらも、土着勢力による管理がなされていたとした。

一方、李志映は湖南地域の窯跡を集成して、立地や構造等の細部にわたる分析を行っている（李志映2008)。それによれば、Ⅰ期（３世紀前半～４世紀中盤）の窯は、集落内に存在する３基未満のものがほとんであり、半地下式が一般的である。そして、羅州雲谷洞３－１号窯跡と扶安富谷窯跡以外は全て小型であり、ほとんどが全長650cm未満、最大幅も200cm未満、床面傾斜も10～20度である。さらに、出土遺物は、67～99%の割合で軟質土器が占めるという集落に隣接する窯の特色を指摘している。

それがⅡ－１期（４世紀中盤～５世紀後半）になると、依然として１・２基の窯が集落に隣接して存在する地域もあるが、この時期を境として５基以上で群集するものが出現するのが特徴である。規模は、小型～大型のものがあるが、小・中型の窯が圧倒的であり、前代の傾向を受け継いでいる。床面傾斜も規模によって異なるが、20度以上の窯も出現する。その他、多岐にわたる詳細な分析をしているが、鄭一と同様に５世紀後半代以降には、分業化や専門化の傾向が認められる点を最大の特徴としている。

以上の２編の論考は、主に湖南地方（全羅道）を中心とした窯跡、土器生産の研究である。４世紀以前の在り方は、小稿で紹介する京畿道や忠清道の窯跡のあり方ともきわめて共通する部分が多い。詳細な比較・検討は後日に譲るが、すくなくとも原三国時代および４世紀代には、百済あるは馬韓とされる地域では、鎮川地域の窯跡群を除外すれば、ほぼ同じような生産体制であったことがわかるのである。

2. 京畿道・忠清道地域の窯跡

京畿道・忠清道で調査された窯跡は、18遺跡を数える（表１)。ただし、三龍里窯跡群と山水里窯跡群は至近距離にあるため、同一遺跡と考えれば17遺跡となる。また、この他にも窯跡として認識されている遺跡は各所に存在するが、本稿では発掘調査されたものに限って掲載する。また、調査中もしくは整理中のために図面が未公表のものも多くある。発掘調査が行われたものは表１に掲載し、報告書等で図面が公開されたものは図を掲載している。所属時期については、その決定が極めて難しいため、本稿では概略的に記すことにする。

京畿道・忠清道地域の窯跡は、図表に示したように、広範囲にわたって分布している。原三国時代から４世紀代のものが主流であるが、京畿道坡州市から忠清南道にかけて存在する。全羅道においても同様の窯は各所で確認されているため、土器窯は京畿道～全羅道において普遍的な存在であったことが分かる。その多くは、軟質土器を含む瓦質的な焼成のものが多く、一部は陶質土器も存在する。

今回集成した京畿道・忠清道の窯は、相対的に小規模のものが多い。もちろん所属時期にもよるが、燃焼部と焼成部をあわせた長さは、最大でも８ｍ弱であり、それ以下のものがほとんどである。焼成部長は４ｍ未満のものが多く、最大幅も２ｍ未満のものが多い。もちろんそれ以上の規模をもつものもあるが、相対的に少ないといえる。しかし、鎮川三龍里・山水里窯跡群では４ｍを越すものが多い。特に、三龍里90－４号窯が610cm、同90－５号窯が520cm以上の焼成部長を有し、最大規模を測る。鎮川三龍里・山水里窯跡群は、３～４世紀代にかけて、継続して土器が生産されており、技術的な改良によって大規模な窯構造が作られた可能性がある。その他、４ｍ以上の焼成部をもつものは、鶴岩里窯跡群や玉南里遺跡であり、いずれも５～６世紀代の窯である。

窯の構造で特徴的なものは、燃焼部と焼成部の境に存在する段（垂直型燃焼室）である。窯によって差違があり、比較的浅くて不明瞭なものから30cm以上の高低差をもつものがある。一般的に原三国時代には顕著に認められる。

表1　京畿道・忠清道地域の土器窯一覧　（　）は現存規模、〈　〉は筆者が図面から計測した規模である。

遺　跡　名	所　在　地	全長	焚口幅	焼成部長	焼成部最大幅	焼成部角度	有段	時　期	備　考
陵山里1号窯	京畿道坡州市月籠面陵山里	880	70	375	240		○	原三国時代～4C	
2号窯		(520)		375	240				
所下洞遺跡	京畿道光明市所下洞	400	80	360	150	18	○		
佳才里1号窯	京畿道華城市八灘面佳才里	(280)			110	17		原三国時代～4C	
2号窯		(160)			115	12			
3号窯		(180)			110	15			
4号窯		(346)		(346)	126	15			
青渓里1号窯	京畿道華城市東灘面青渓里	(550)			(140)			原三国時代～4C	
2号窯		(580)			(180)				
3号窯		(560)			(170)				
4号窯		(576)			(170)				
5号窯		(516)			(140)				
6号窯		(310)			(136)				
7号窯		(210)			(128)				
農書里1号窯	京畿道龍仁市器興邑農書里	(680)			(176)	15内外		原三国時代～4C	
2号窯		(564)			(170)	14内外			
3号窯		(304)			(146?)				
4号窯		(230)			(127?)				
龍院里遺跡	忠清南道天安市城南面龍院里	450		246	180	約20	?	原三国時代～4C	
梅城里1号窯	忠清南道天安市並川面梅城里	820	184	394	240	22	○	原三国時代～4C	
2号窯		(410)			(150)	(25)	○		
三龍里88－1号窯	忠清北道鎮川郡梨月面三龍里	540		〈270〉	130	13	?	三龍里山水里1段階	
88－2号窯		400		〈298〉	150	13	○	〃	
89－1号窯		420		〈285〉	150	10	○	〃	
89－2号窯		(570)		〈現400〉	190	20	○	三龍里山水里2段階	
90－1号窯		625		〈現450〉	220	23	○	三龍里山水里3段階	
90－2号窯		(235)			160	17	?	〃	
90－3号窯		(520)		〈現370〉	155	22	○	〃	
90－4号窯		790		〈610〉	250	16	○	〃	
90－5号窯		790		〈520～〉	260	15	○	〃	4次面あり
90－6号窯		(540)		〈現410〉	210	16	?	〃	
87－1号窯		(590)		〈現340〉	300	17	○	三龍里山水里4段階	
山水里87－5号窯	忠清北道鎮川郡德山面山水里	678		375	290	16～25	○	三龍里山水里5段階	
87－6号窯		790		440	345	18～	○	〃	
87－7号窯		765		450	310	17	○	〃	
87－8号窯		770		460	295	17	○	〃	
87－1号窯		240		〈現125〉	150	16	○	〃	
87－2号窯		305		〈現210〉	210	30	○	〃	
87－3号窯		240		〈現90～〉	180	18～	○	〃	
87－4号窯		360		〈現190〉	160	24	○	〃	

鷹岩里１号窯	忠清北道燕岐郡芙蓉面鷹岩里	(210)			(190)			４Ｃ	
２号窯		(576)			136			４Ｃ	
３号窯		(600)			200			４Ｃ	
４号窯		(426)			270			４Ｃ	
５号窯		600			190			４Ｃ	
６号窯		714			200			４Ｃ	
佳景４地区遺跡	忠清北道清州市興徳区佳景洞	570		328	150	20	○	４Ｃ後半	
大井洞遺跡	忠清北道大田市儒城区大井洞	(770)		320	180	13	○		
貴山里１号窯	忠清南道公州市牛城面貴山里	530	36	286	130	17	○	４Ｃ	
２号窯		700	46	364	120	18	○	４Ｃ	
鶴岩里１号窯	忠清南道青陽郡定山面鶴岩里	812	200	470	365	27	○	６Ｃ後半	
２号窯		738	212	480	278	20	○	６Ｃ後半	
分香里遺跡	忠清南道青陽郡長坪面分香里	(615)	90	350	128	16	?	原三国時代	
中井里１号窯	忠清南道扶餘郡扶餘邑中井里	816	110	390	310	28		６Ｃ	
２号窯		920	170	384	220	34	○	６Ｃ	
松菊里（70地区）	忠清南道扶餘郡草村邑松菊里			440	170	15	○	６Ｃ	76－70地区
１号窯		487	58	305				６Ｃ	
２号窯								６Ｃ	
玉南里遺跡	忠清南道舒川郡馬西面玉南里	850	140	420	160	18		５～６Ｃ	

玉南里窯跡のように段差を有しないものが５・６世紀代には登場するようであるが、京畿道・忠清道地域ではこの時代の窯跡例が少ないため明確な系譜は不明である。しかし、扶餘地方では松菊里遺跡や中井里遺跡のように、６世紀代においても段を有するものがあり、形態や技術的な伝統が存続して、無段の窯と共存していた可能性が強いと考えられる。

燃焼部前端部の掘り込みは、上記の焼成部前部の段と対をなして燃焼部を構成するものである。立地等の条件によって差違があるが、原三国時代を中心として多く認められる。焚口部を一旦掘り込んだ燃焼部となり、極めて特徴的である。明確に段状に掘り込むものが多いが、比較的浅いものや、緩やか傾斜するものもある。前端部に段差を有さないものは、６世紀代に存在する。

各遺跡の窯跡数は、鎮川三龍里・山水里の20基を除けば、青渓里遺跡が７基、鷹岩里遺跡が６基、佳才里遺跡と農書里遺跡が各４基で構成されており、その他の遺跡は１～３基の小規模な群構成であることが分かる。そして、鎮川三龍里・山水里窯跡群や中井里窯跡群を除く他の遺跡は、集落内や集落に隣接している場合が多い（集落近隣型)。集落内での分布や供給地、そして時期的な検討が必要であるが、原三国時代から４世紀代にはこのような形態が多いようである。また、５世紀以降の状況がやや不明であるが、集落近隣型は６世紀代でも確認できるものもあり、この地域の特色とすることが出来よう。

また、長期間にわたって生産された窯跡はほとんど無く、複数基を擁する遺跡においても比較的短期間の操業を行っている点が特色である。多くの場合が軟質土器と瓦質土器的な土器を生産しており、窯の構造も陶質土器の窯と比較してやや脆弱なため、短期間に複数基の窯を造成した可能性がある。三龍里・山水里のように、長期にわたる操業の結果が窯の群集という形で残されるが、集落内に存在する窯は、多くの場合は限定された期間の操業と考えられる。

こうした中で鎮川三龍里・山水里窯跡群は、非常に特殊な存在であることわかる。３・４世紀を中心として継続して操業が行われており、結果的に20基以上の窯が築造されている。窯構造も比較的小型の単純なものから大型化

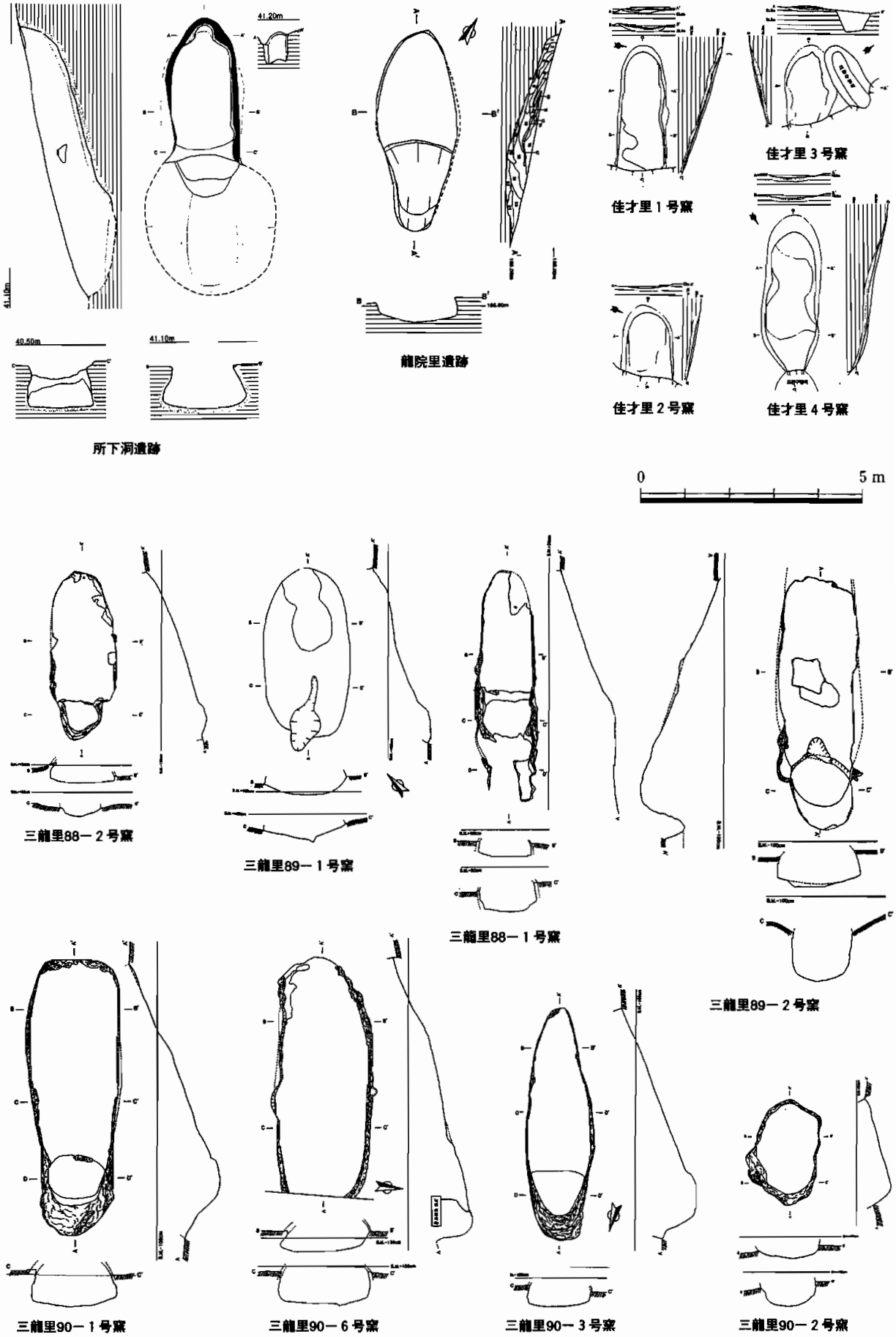


図1　韓国京畿・忠清道の土器窯跡（1）

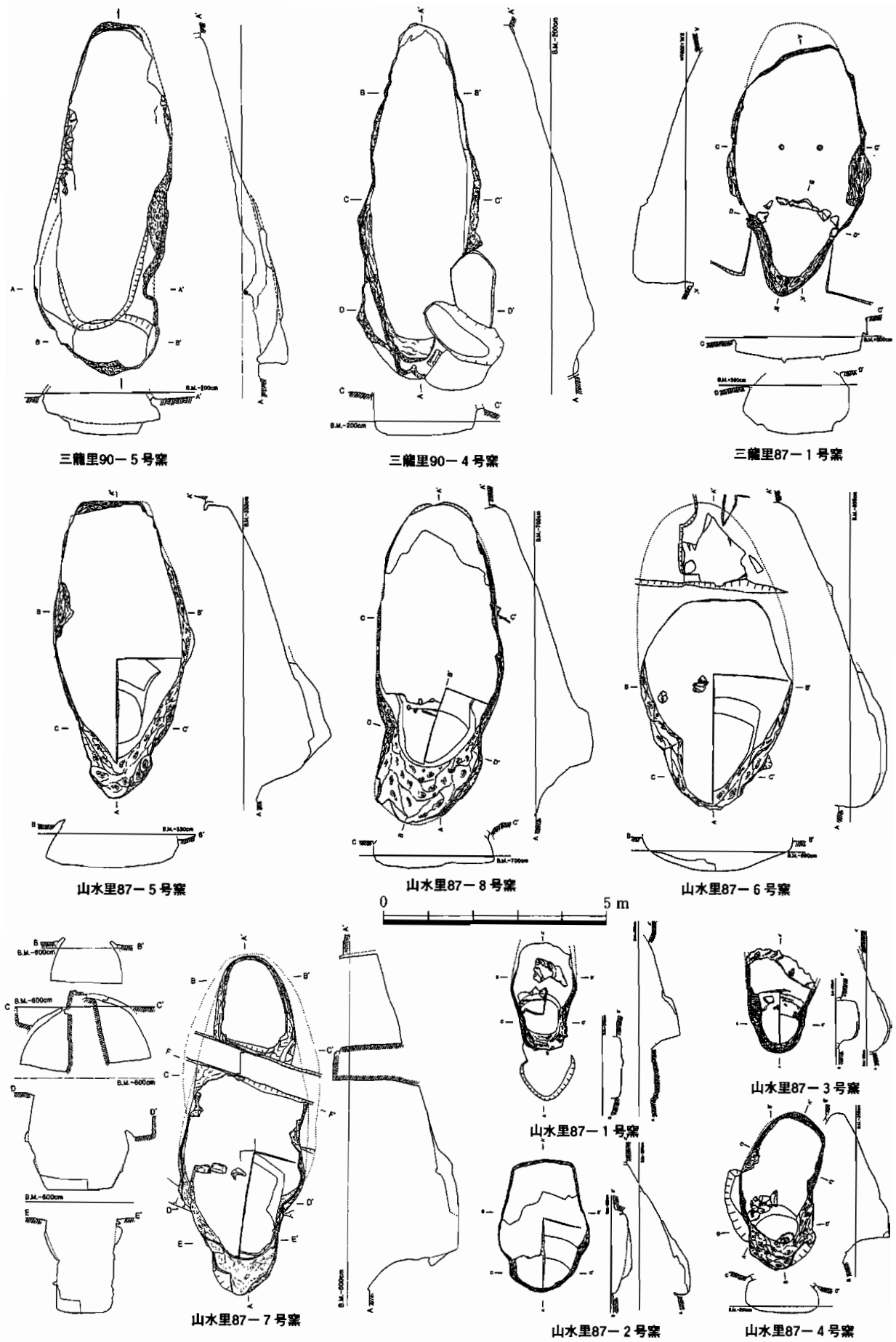


図2　韓国京畿・忠清道の土器窯跡（2）

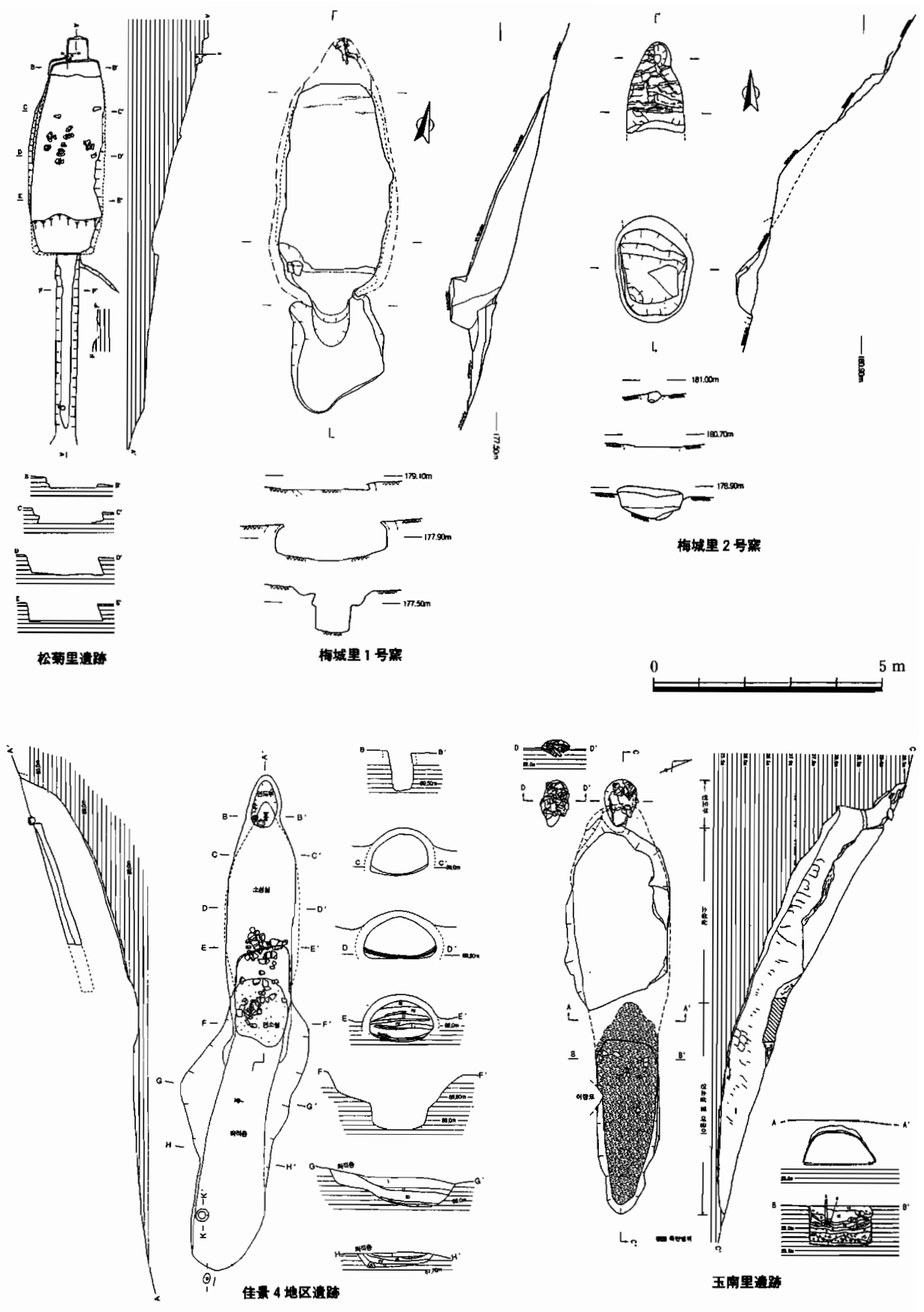
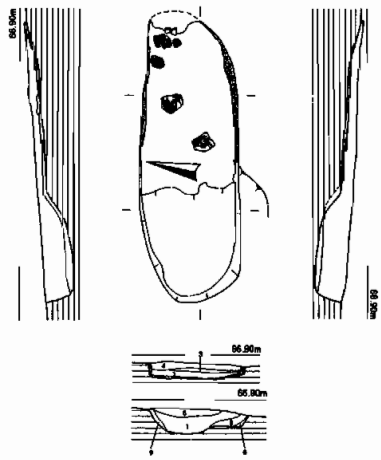
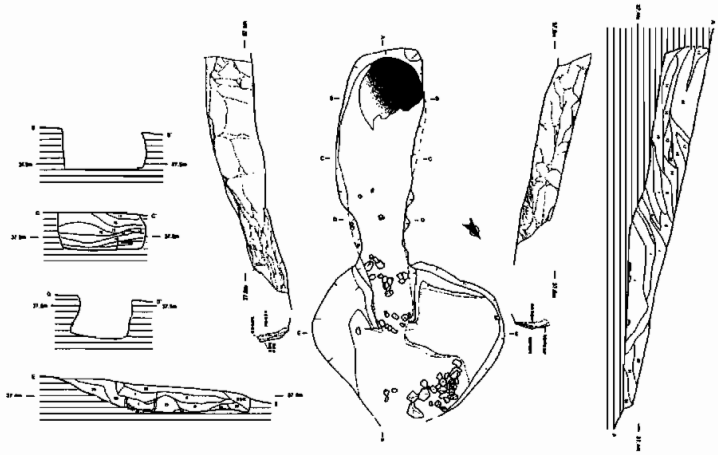


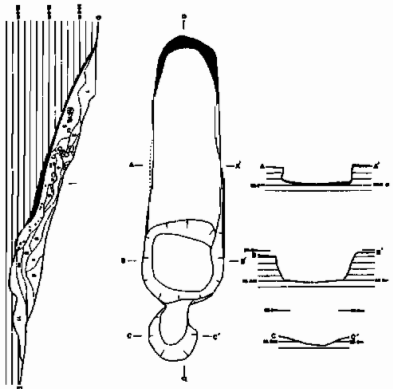
図3　韓国京畿・忠清道の土器窯跡（3）



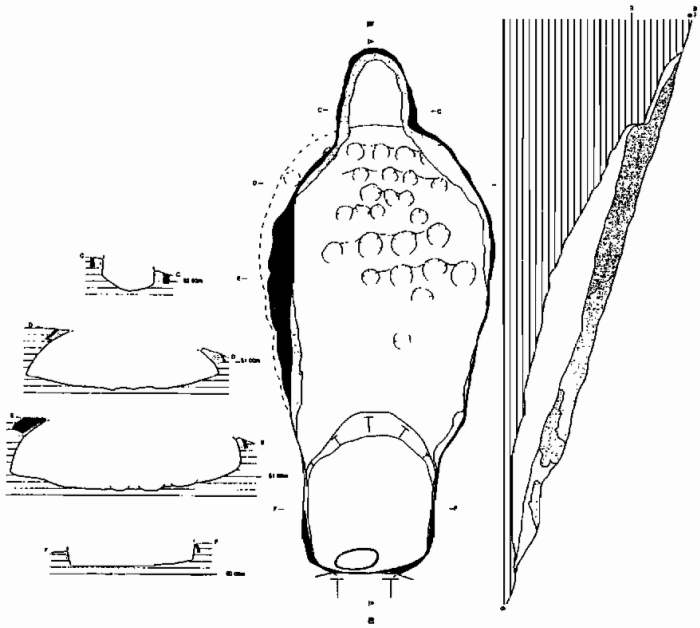
大井洞遺跡



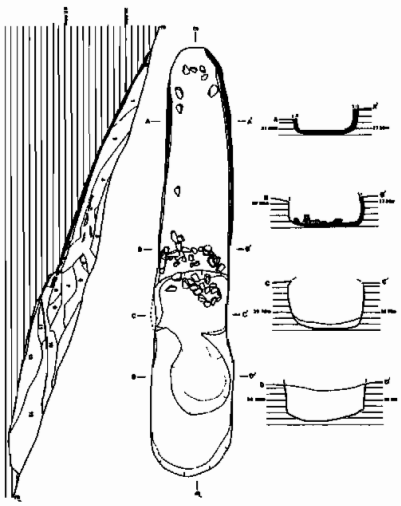
分香里遺跡



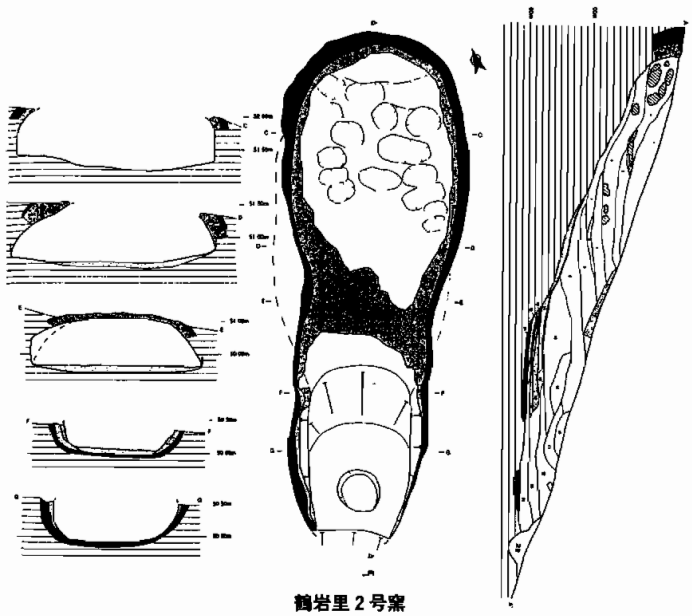
貴山里１号窯



鶴岩里１号窯



貴山里２号窯



鶴岩里２号窯

0　　5 m

図４　韓国京畿・忠清道の土器窯跡（４）

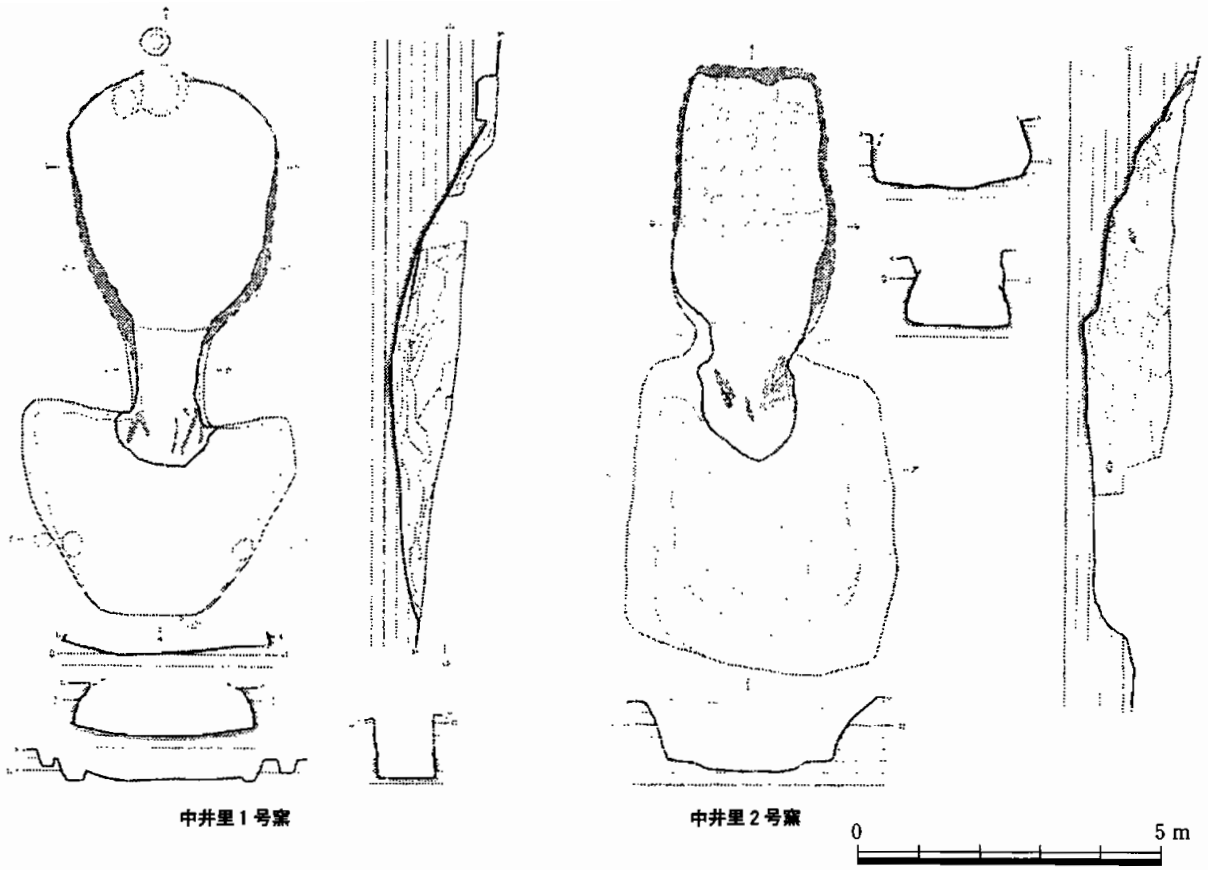


図５　韓国京畿・忠清道の土器窯跡（５）

が達成され、蛇頭形の異常な形態に発展するようである。こうした窯構造の変遷が追える点も極めて重要であり、窯構造の他地域への波及等の検討も可能になろう。三龍里・山水里窯跡群で生産された土器は、時代が下がるに従い、近隣の小地域に供給されていたものから、やや広めの中地域、最終的に広範囲に流通したことが確認されており、最終段階には遠くソウル市風納土城まで供給されている（柳2002)。このような広域型の窯跡群は、京畿道・忠清道では三龍里・山水里窯跡群のみであり、極めて重要な存在である。

三龍里・山水里窯跡群に続くような、４世紀後半代以降の窯跡群は今のところ確認されていない。おそらくは、三龍里・山水里窯跡群の近隣もしくは風納土城や夢村土城の近郊に存在する可能性があろう。こうした点を含めても、４世紀後半から５世紀代の京畿道・忠清道地域の窯跡、窯業（土器）生産は、未解決な部分が多いといえる。

その他、かつて窯として報告されたもののうち、風納土城内の遺構は、近年土器窯ではないとの判断がなされたため未掲載とした。また、高句麗窯の可能性をもつとして報告された清原南城谷遺跡は（車勇杰他2004)、窯構造が極めて不確定なため、同じく小稿では掲載をしていない。

3. 京畿道・忠清道地域の土器窯業生産

以上のように、京畿道・忠清道地域の窯跡は、原三国時代以降ほぼ全域で確認出来るものの、大きな偏りがあった。鎮川地域では、三龍里・山水里窯跡群に見られるような本格的な窯業生産の始動が確認出来るものの、それ以外の地域では類似した形態は示さず、集落内生産を志向している点が特色であった。鎮川三龍里・山水里窯跡群の成立と操業は、おそらく周辺諸国にモデルがあったと推測でき、百済国の国家形成に重要な役割を果たしたと考えられる。ソウル風納土城では、４世紀後半代から５世紀にかけて陶質土器を含む多量の土器が出土しており、漢城

期の王宮を含めた都市部への製品の供給は不可欠であった。近隣に鎮川三龍里・山水里に続く窯跡群が存在することは間違いない。

權五榮は、このような百濟・馬韓地域の土器生産を次のように整理している（權2005）。第一は集落内や隣接集落への供給を行ったものであり、極めて供給範囲は狭く、集落内の自給的な生産である。第二は一集落を越えた小・中地域供給型であり、一定の地域内へ供給する形態である。そして第三はかなり遠距離の地域へも供給した広域供給型の３つに分類している。鎮川三龍里・山水里窯跡群は、小地域供給型から広域供給型へ拡大しており、きわめて特殊な例として位置づけられる。

しかし、鎮川三龍里・山水里窯跡群を除くほとんどの窯は、第一の供給型である。原三国時代から４世紀代の窯のほとんどがこの類型であり、当地域やこの時期の特色といえよう。一定の地域で展開した第二・三の供給型とほぼ並行して、こうした第一の供給型は原三国時代から、一部は６世紀代まで確認出来るのも特徴の一つであろう。集落に規制された極めて未分化な窯業生産が存続していたと考えられる。

おわりに

以上のように、京畿道・忠清道地域の窯業生産は、原三国時代から４世紀代を中心として展開し、一定の特色を備えていた。しかし、５・６世紀代の様相は、不明な点が多い。忠清南道では熊津、泗沘への百済の都の移動にともない、土器生産も一定の増加を認めると考えられるが、総合的な調査は今後の課題である。

前述の通り全羅道では、５世紀前半代までは京畿道・忠清道地域とかなり類似した様相を呈している。それが５世紀後半代以降、急激な生産の増大が認めるようになる。このような動向と、京畿道・忠清道地域あるいは慶尚道地域との差違の検討も重要な課題であり、順次整理していくことにしたい。

［付記］ 白石太一郎先生が３月末をもって奈良大学を定年退職される。拙稿が記念論集を汚すことをお赦し下さい。先生には５年の間、奈良大学文学部文化財学科の教育・運営にご尽力いただきました。また、先生が代表をつとめられた科学研究費補助金「近畿地方における大型古墳群の基礎研究」には、私も分担者に加えていただき、調査・研究の機会をいただきました。そして、先生の退職年度には、大学を１年間留守にして、多々ご迷惑もおかけしました。この間のご指導とご厚情につきまして、心より感謝申し上げ、さらなるご指導をお願いする次第です。

本稿は、2008（平成20）年度奈良大学教員在外研修の成果の一部である。研修の機会を与えて頂いた大学当局に感謝申し上げ、多くの配慮をいただいた所属学部・学科の先生方に御礼申し上げます。

在外研修は、韓国・HANSHIN大学校博物館で受け入れていただき、李南珪先生、權五榮先生、李亨源先生、李基星先生、文京德先生、韓志仙先生をはじめとして、同博物館研究員の皆様に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。その他多くの方々にお世話になりましたが、ご芳名につきましては改めて次稿にて記させていただきますので、了解下さい。

<引用・参考文献>

李相俊1997「蓀谷洞土器窯の類型と構造的特徴」『年報』第８輯　国立慶州文化財研究所

李志映2008「湖南地方３～６世紀土器窯の変化様相」『湖南考古学』30

이호他2006『青陽鶴岩里・分香里遺跡』（『遺跡調査報告』第22冊）忠清南道歴史文化院

李弘鍾・他2002『大井洞遺跡』（『高麗大學校埋蔵文化財研究所研究叢書』第14輯）高麗大學校埋蔵文化財研究所

李浩炯・他2000『公州貴山里遺跡』（『(財) 忠清埋蔵文化財研究院文化遺跡調査報告』第10輯）（財）忠清埋蔵文化財研究院
李秀珍2008『光明所下洞遺跡』（『韓國考古環境研究所研究叢書』第30輯）韓國考古環境研究所
禹鍾允・他2004『清州佳景４地區遺跡（Ⅱ）』（『調査報告』第101冊）忠北大學校博物館
呉圭珍・他1999『天安龍院里遺跡　Ａ地區』（『(財) 忠清埋蔵文化財研究院文化遺跡調査報告』第19輯）（財）忠清埋蔵文化財研究院
權五榮1991『松菊里』Ⅳ（『国立博物館古蹟調査報告』第23冊）国立中央博物館
權五榮2005「百濟の生産技術と流通体系の理解のために」『百済の生産技術と流通体系』
權五榮・他2007『華城佳才里原三國時代土器窯址』（『한신大學校博物館叢書』第28冊）한신大學校博物館
송현정2006「扶餘中井里土器窯址発掘調査」『第14回湖西考古学会学術大会　湖西地域文化遺跡発掘成果』湖西考古学会
趙詳紀・他2005『天安梅城里遺蹟』（『発掘調査報告』第67冊）中央文化財研究院
全榮來1988『百濟時代の窯址研究』
崔秉鉉1990「鎮川地域土器窯址と原三國時代の問題」『昌山金正基博士華甲記念論叢』
崔秉鉉・他2006『鎮川三龍里・山水里土器窯址群』（『韓南大學校中央博物館叢書』24）韓南大學校中央博物館
鄭　一2008「光州杏岩洞遺跡を通してみた百濟時代土器窯－５～６世紀を中心として－」『百濟研究所発表資料』
朴秀鉉2001「湖南地方土器窯に関する一試論」『研究論文』第１号　湖南文化財研究院
방기영2007「龍仁農書里遺跡」『第31回韓国考古学全国大会　国家形成に対する考古学的接近』韓国考古学会
柳基正2002「鎮川三龍里・山水里窯土器の流通に関する研究」『崇實史學』15・16
柳昌善・他2008『舒川玉南里遺跡』（『(財) 忠清文化財研究院文化遺跡調査報告』第82輯）(財)忠清文化財研究院
車勇杰2004『清原南城谷高句麗遺跡』（『調査報告』第104冊　忠北大学校博物館）
배성혁2007「新石器時代の土器窯研究」『韓国考古学報』第62集

＜図面出典および＞

所下洞遺跡：李秀珍2008
佳才里窯址：權五榮・他2007
農書里遺跡：방기영2007、畿湖文化財研究院資料
龍院里遺跡：呉圭珍・他1999
梅城里遺蹟：趙詳紀・他2005
三龍里・山水里窯址群：崔秉鉉・他2006
佳景４地區遺跡：禹鍾允・他2004
大井洞遺跡：李弘鍾・他2002
貴山里遺跡：李浩炯・他2000
鶴岩里・分香里遺跡：이훈他2006
中井里窯跡：송현정2006
松菊里遺跡：權五榮1991および韓国伝統文化大学韓国伝統文化研究所指導委員会の資料
玉南里遺跡：柳昌善・他2008

その他、陵山里窯跡は、畿湖文化財研究院指導委員会資料、青渓里窯跡群は韓白文化財研究院指導委員会資料、鷹岩里遺跡は韓國考古環境研究所指導委員会資料を参照とした。